

C. S. ヘル技師



桜井理事

愛知用水公団
理事 桜井志郎 殿

拝啓

愛知用水事業現地駐在技師としての私の対EFA雇用契約は、1958年7月30日をもって期間満了いたします。まことに残念であります、一身上の理由によって私は帰国しなければなりません。

この書簡は、貴下に親しく感謝の意を表し、あわせて私の滞日中、貴下を通じて数々の御厚意とおもてなしを示された公団内部の各位に対して、私の心からなる謝意を表明するために差上げるものであります。

貴下の公団理事としての優れた管理指導能力および本事業に関連して発生する諸問題の適切な処理方策に対して、私は深い敬意を捧げたいと存じます。

また私は、公団が数多くの優秀な職員をようしておられることをも特に申上げておかねばなりません。

名古屋に参りまして以来、御親切にお招き下さったさまざまな社交的行事を思い起して私も妻も実に言葉に尽せない喜びにひたっております。

滞日中私の果たした仕事が、愛知用水事業の計画設計の面に、いくらかでも役立ったことをひそかに願っております。また私としては、このような大規模の事業に参加できたことを喜びかつ光栄に存じているのであります。

おわりに、帰米後におきましても、私で何か間に合うことがございましたら、喜んで、お役に立ちたいと存じますことを特に申添えます。

引き続き貴下の御成功と御健康を祈りながら、重ねて御礼の言葉を申し上げます。 敬具

1958年6月23日

C. S. ヘル

E. F. Aの技師たち

ルービンス氏の感想をそえて



在日E. F. Aの主要メンバー、右からルービンス総支配人、ヘル、リブナー、デヴィッドソンの各技師

Erik Floor & Associates 略してE. F. A——昨年5月公団と技術協定を締結したこのE. F. Aは、シカゴに本社をおく技術スタッフ約40名の技術会社である。ルービンス総支配人以下11名の技師が日本に派遣されて、現に愛知用水事業の主要工事に関する設計・施工監督などの各種の職務に従事しつつある。アイチ・プロジェクトを“なかだち”とする日米技術の協力ないし交流からもたらされるものは、色々の意味で興味深く、また彼等の技術者がそこから学んでくるものも多いように見受けられるが、下に掲げるルービンス総支配人の感想もその一つであろう。同氏の一文は編集者の意図からはややそれているが、これはこれなりにいくつかの示唆を含んでいるように思われる。

愛知用水計画に対して、われわれ日米両国の技術者が協力を始めてからすでに2年を経た。この2年間にわれわれは多くのものを見、多くのものを学ぶことができた。異った背景をもつ民族間の共同作業においては、誤解ないしそれに基くトラブルの発生は、残念ながらこれを絶無にすることはできない。しかし、われわれは背景の相違を理解ある眼でながめることによって、事態の好転を期待することができるであろう。

相違点の多くは、幾世紀にわたる民族の文化と理想の所産に深く根差しているのであるが、しかしこれは学者たちがその書齋において考察すべき問題であろう。われわれはもっと散文的に、そして土木技術的な見地からこれをみなければならぬ。

相違点はいろいろあるが、その中でももっとも鋭い相違点は2つあると思われる。

その第1は、日米両国における典型的なかんがい事業計画の性格というものが全く異っていることである。

第2は、用地取得の問題である。とくにこの用地の問題によって、技術的諸問題に対する取組み方が変わってくるという点は、全くわれわれの想像もできない特異な事実であったことを告白しなければならない。

問題の焦点を見失わないために、われわれはこの2つの相違点を語る前に、まずいくつかの類似点の方を強調した方がよいと思う。

私たちは技術者として同じように、自然の根本法則について必要な訓練を受けてきている。したがって言語という大きな障壁があるにもかかわらず、日米の技術者は協

力して、もっとも安い原価で、最終需要家(農民)の負担が最小であるように、しかも事業としても経済的に成功しようとする各種の工事の完成をめざしている。これらの技術者としての念願は双方に共通しているのである。私たちはすでに予備報告(Preliminary Report)を研究していた頃から、この事業いや日本におけるあらゆるかんがい事業が、施行地域の密集した人口と複雑な地形のゆえに、多様かつ困難な問題を生起するであろうことを予想していたのである。

次に相違点について述べよう。もちろん、かんがいの目的というものは、いずれの国においても変ることはない。しかしアメリカにおける主要なかんがい事業は、降雨量が日本などと比較にならぬほど僅少であるため、商品化できる農作物の栽培がほとんど望み得ないというところに、その発達の契機をもっているのである。事業はかんがい用水がなければ全然無価値な乾燥地帯に行われるが、大部分広大で平坦な谷である。また勾配をつけることもさして重要な問題ではない。

降雨は一般に少いが、特定地域にはしばしば短期間に大きな降雨がある。しかし排水の問題は小さく、水路をかん排両用に使用することはごくまれである。

アメリカでかんがい土木事業を新規に行う場合に楽なことは、日本におけるように交渉しなければならぬ数多くの政治団体がなく、また郡、町、村のような政治的区画もないことである。事実多くの場合、開発された土地は連邦政府が所有している。もっとも土地が政府所有だからといって、トラブルが全くないわけではない。例えばかんがい区域、国立公園地区、インディアン指定保留地等の間には、利害関係の対立がみられる。しかしその問題は次のような経過で解決されている。

アメリカでは、かんがい開発事業は全体として、地方の利害関係に妨げられることなく計画されるべきだと考えられている。というのは、多くの場合、地方の利害関係というものは今なお発展の途上にあり、たがって、い

まだ明確に確立されていないと考えられるからである。技術者は水理計算と構造物の予備設計をもって設計に接近し、そのあと障害のないことを確認しながら最終設計を完了させることができる。

以上述べたところは、とりまなおさず用地取得問題における主要な相違点にもつながるものである。連邦政府で事業計画が考慮されると、まず公聴会が開かれて、その席上ですべての異議が検討し考慮される。そして一たん事業計画が承認されて設計が開始されると、必要な土地はどこでも獲得される。用地取得にわざわざいされて、スケジュールが遅延したり設計が変更されたりするようなことはないのである。

さらにまた用地買収にあたって、交渉によって合理的な価格で買収できない場合は、政府がこれを「収用」する。収用されると、直ちに建設工事が開始されるよう、所有者に対し強制的に土地放棄が命令される。そのあと裁判所が決定した適正代価が土地所有者に支払われるのである。この代価は通常適正なものであって、決して不当な高値ではない。

農地の種類、所有面積および開発の集約度には、両国の

間に大差があることはもちろんであるが、半ば乾燥したアメリカ西部地方における個人の所有面積は平均 300ヘクタール(約 300町歩)以上である。であるから、アメリカで交渉の相手が1人ですむ用地問題も、日本では300人の所有者を相手にしなければならないであろう。そしてこのことは同時に、300戸の農民の移住を意味し、300件の問題の発生を意味するのである。その問題解決の困難さ複雑さは想像に余りがある。私たちからみると日本の技術者は、技術的問題に心労する何倍かの精力を、用地問題に傾注して、しかもなお足りないように見える。そしてこの避けようのない現実には、愛知用水計画に協力しつつあるわれわれアメリカの技術者たちにも、日を追うて深刻かつ切実な関心をよびさましていかざるを得なかったのである。

× × × × × ×

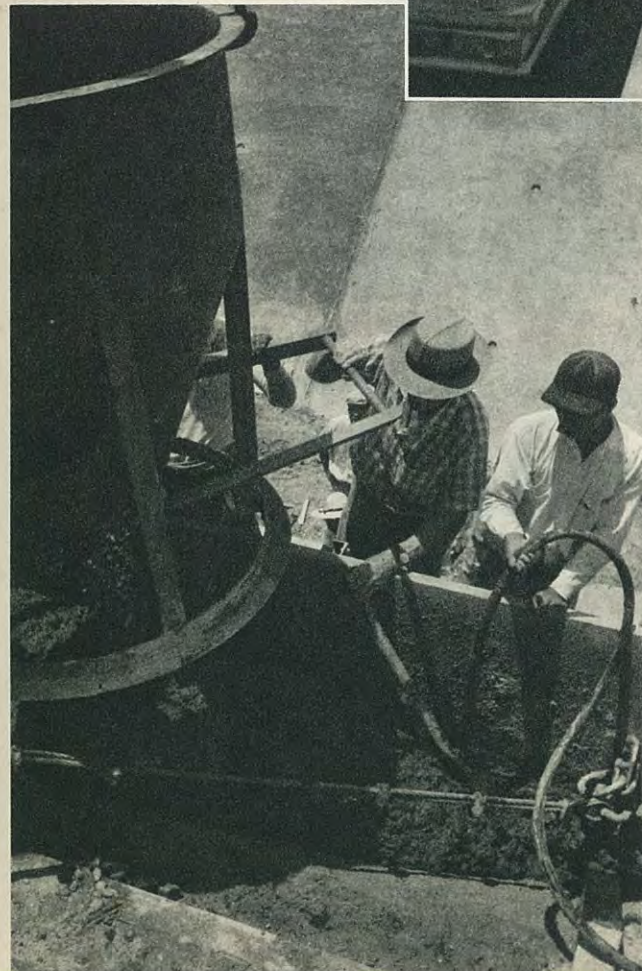
以上の一文の目的は、日本のかんがい事業計画におけるある種の条件、そしてこれと全く対しよ的なアメリカにおけるそれをおきならべてみることにあった。何らかの参考になれば幸いであると思う。

(1958. 8. 15. R. E. ルービンス)

彼らとその籍をおく工務部技術援助課の一部、机の並べ方がいわゆる「人事院式」でみんな前向きになっている。彼らのデスクはその体にふさわしくさぶるデカイ



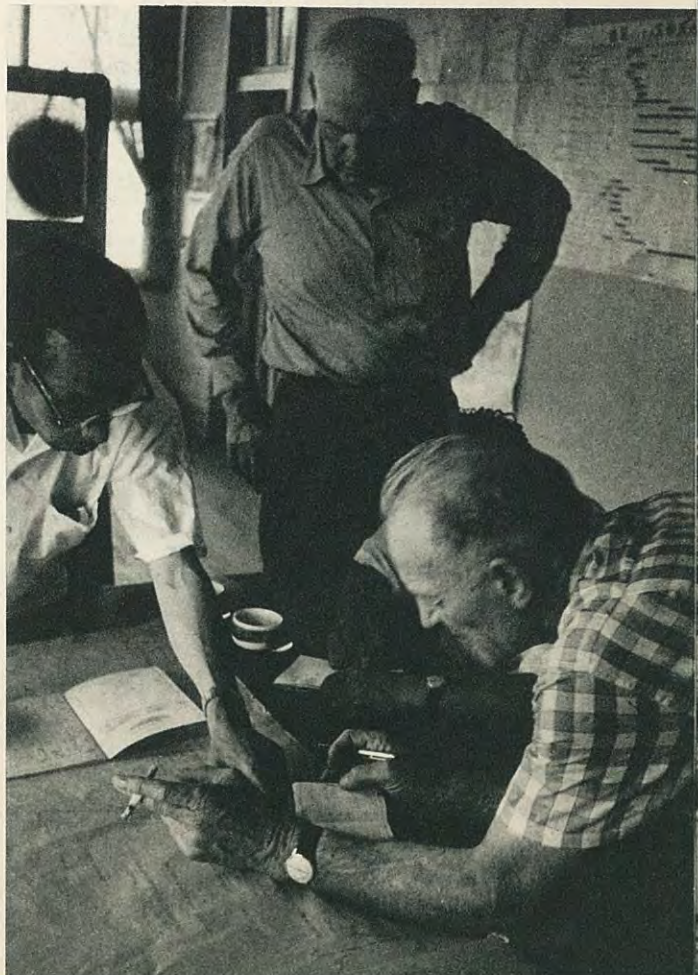
老令のチーフ・エンジニアが現場で労務者に交って、汗ミドロで働いている。これも日本の技術者からみると異様な風景であろう。コンクリート面の仕上げにコテをにぎると、「一ナゼ1000円」と労務者たちが目を丸くする



いつまでも故国の習慣を捨て切れない日本人とちがって彼らは日本における日本的な生活に同化しようと意識的に努力しているようだ。工事現場の町の食堂でもフォークをわざわざ箸にかえてもらおう、そして案外器用に使いこなして得意である



日本でいえば課長クラスのチーフ・エンジニアが、みずから図面のチェックをする。「自分の手けた仕事はその最後を見届ける」という彼らにとっては当然の心構えなのであるが、反面精力と時間のロスもまぬがれないようである



会話はほとんど通訳を介するが、技術的問題だけに言葉の上の不自由はさほどでもない。彼らも1年たてばカタコトをしゃべりご愛嬌である

図面の美しさは無類、もって範とするに足る。上方に平面図、下方に縦断図が書かれ、計画線が決定するまでは青写真で間に合わせる。原図の分類整理も実に厳格だ

